

## 5 外国の文字を表語文字として使っている日本人の知恵

以上述べて来たところで、「表音文字の表意化は、表音文字の出現以来今も変ることのない趨勢である」ことは明らかになったと思います。自ら文字を作り出さない限り、そして、自国語の表記のために外国の文字を借りる限り、“表音文字”という代用品によって、自分の国の言葉表現するより他に方法がないのですが、わが国では、外国の文字を名実共に“表語文字”として借り入れることに成功しました。

つまり、表語文字の持つ“音声”の方を捨てて“意味”を取り、その意味に当る国語の発音を、その漢字の“音声”に入れ替える、という作業をしたのです。

例えば、“波”という漢字を例にして言いますと、この字の持つ“ハ”という音声を捨てて、その代わりに、その漢字の“意味”と同じ意味の日本語である“なみ”という言葉の“音声”を“波”に入れ替えたのです。

その結果、“波”という漢字は、中国の文字でありながら、わが国の“なみ”という言葉を表す文字としてしまったのです。だから、“波”は、“なみ”という言葉の“音声”も“意味”も共に兼ね備えた、名実共に完全な日本語の“表語文字”となったわけです。

この用法こそ、今までの、中国からの帰化人やその子孫によって教えられた“かな”の用法とは違って、日本人自らの手で、自らの能力に

より生み出した用法であって、これこそ世界に卓絶した、世界に誇ることのできる用法だということができると思います。

橘之 花散里乃 雷公鳥 片恋為乍 鳴日四首多寸(万葉集)

これは、万葉集に見られる、漢字を、日本語のための“表語文字”として使用しているものの一例ですが、これを、先に挙げた

和我夜度爾 左加里爾散家留 宇梅能波奈 知流倍久奈里奴 美牟必発聞我母

に比べると、遥かに読み易く、理解し易いことがよく解ると思います。

しかし、この表語的用法は、先に述べましたように、五十音に当る漢字だけ覚えれば、それで文章が書ける“表音的用法”と異り、数千字という漢字を学習し、これを十分に理解していなければ出来ない用法です。

だから、よほど能力が高くないと、この用法を身につけることは出来ません。また、その人の漢字力の高低によって、“表語的用法”の使用度に差が生じます。

それは、一年生の書く文章は漢字が少なく、学年が進み、漢字力が高まるにつれて、漢字の使用が多くなるのと同じです。この間の事情は、次の例でよく解ると思います。

石激 里見之上乃 左和良妣乃 毛婁出春爾 成米鴨(万葉集)

この歌では、“石激”“春”などの表語的用法の中に、“左和良妣”“毛要”などの“表音的用法”が混っています。これなどは、私たちが、漢字を忘れた場合、かな書きで済ませるようなものです。

現在の漢字用法は、外国の文字を“表語文字”として使用するという、世界の歴史の上に特筆大書すべき優れた用法であって、“表音的用法”である“かな”の欠陥を補うものとして“かな”使用の反省の上に考え出されたものであることに注目して頂きたいと思います。

“かな”文字論者やローマ字論者たちが、「我々の先祖は、最初、漢字ばかりで文を書いていた。しかし、かなが発明されると、漢字の使用は年ごとに減って行った。表音文字である“かな”が、原始的な文字である漢字を駆逐して行くのは自然の趨勢である」と言い、「明治以来、現在までの漢字の減少率から推定すると、昭和××年までには漢字が全くなってしまうであろう」などと、変な推計をしていますが、全く誤った論と言わなければなりません。

確かに、わが国の最初の記録は、漢字ばかりで書かれたものでした。しかし、それは、漢文であって、国文ではありません。わが国の言葉を表記したものではないのです。

わが国の言葉を表記した最初のもは、“和我夜度爾……”というような“表音的用法”である“万葉がな”であって、文字こそ漢字ではありませんが、実質は“かな”です。

“表語文字”としての現在のような漢字の用法は、万葉がな以後の発明であり、一般的に言えば、漢字の使用は、その後徐々に増加して行ったものと考えられます。

純粹の国語の表記として、漢字が最も多く用いられたのは、恐らく“明治時代”の初期ではなかったかと思います。それまで、教養のある男子は、文章を書くのに“漢文”を用いていたので、その影響を受けて、明治初期には漢文調の国文が多く、従って、漢字が多く用いられたわけです。

日本語特有の“てにをは”や、活用のある助動詞などは、“表音文字”である“かな”で表記した方がよい言葉ですが、明治初期の文章には、これが漢字で表記されるものがありました。

名詞、動詞、形容詞、副詞などの観念語は、漢字で、動詞、形容詞の活用語尾や、助詞、助動詞はかなで書きますと、ちょうど分ち書きの効果があって、文章が読み易くなります。だから、かなばかりの文章は読みにくいが、漢字ばかりの文章も読みにくいのです。

明治の文章が漢字を多く使い過ぎた反動で、今は漢字の使用が少なくなっていますが、今の用法は、漢字にした方がよい代名詞や副詞などがかな書きされるなど、行き過ぎが目立っています。もう少し、漢字を多く用いるような方向に引き戻す必要があると思います。

“てにをは”や“動詞、形容詞などの活用”は、日本語特有のもので、

これあるが故に、日本語は世界で最も優れた言葉だ、と私は確信しているものです(このことについては別の機会に説きたいと思っています)。

「表語文字が文字の理想である」とは、たびたび述べて来た所ですが、実は、日本語特有の、この“てにをは”や“語尾変化”は、“表音文字”で表した方がよい、世界で唯一の言葉です。

これだけが、“関係語”と名付けるべき、他国語には見られない、特殊な言葉だからです。観念語ではありませんから、“表語文字”で表すことがむずかしいばかりではなく、かえって読みにくくなるのです。

従って、“表音文字”で表した方がよい言葉を持っているのは、日本語だけで、現在の“漢字かな混り文”というのは、そういう日本語の特性に適合した表記として、長い歴史の中で、私たちの先祖が作り出した、最も能率的な表記法なのです。

観念語は“表語文字”で、関係語は“表音文字”で表記することにより、表語文字と表音文字との長所が共に発揮されて、迅速確実に文意が把握できる“漢字かな混り文”という世界に類のない表記法が生まれたのです。

世界に類がないということで、何でも西欧に追従するわが国の学考の中には、この優れた用法を“乱雑な表記法”“不合理な表記法”だと非難する者が少なくありません。これが“カナモジ論”“ローマ字論”

になっているわけです。

チョムスキー氏が先年来日した時、「私は日本語について知識が不十分なので、確信を以て言えないが、日本の“漢字かな混り文”というのは、世界で最も合理的な表記法ではないかと思う」と語っています。

わが国の経済評論家の第一人者、木内信胤氏は、明治の大発展も、戦後の経済復興も、その原動力を作ったものは、“漢字かな混り文”だと説いています。世界に類のない発展を遂げさせた原動力は、世界に類のないものであるはずで、それは“漢字かな混り文”という最も効率の高い知識吸収を可能にする方法以外に考えることができないと言うのです。

私は、木内信胤氏の見解、チョムスキー氏の見解、共に卓見であると感じるものです。後者は、日本語について十分な知識を持たないアメリカ人であり、前者は、日本人であっても、国語の専門家ではないからです。

漢字訓読の価値、漢字かな混り文の価値について述べました。先人の発明に成る、伝統のある表記法の価値について広く再認識を求める次第です。